

全道へき地複式研宗谷ブレ大会記録用紙

No.1

司会者 臼井 理沙（鬼志別小学校）
記録者 佐藤 建（拓心中学校）
助言者 河原 宣孝（別海町立西春別小学校校長）
駒津 和康（宗谷教育局義務教育指導班指導主事）

【討議の柱】

視点1：集団のまとまりや集団活動上のきまりを意識して活動していたか。

視点2：少人数による人間関係が集団活動を通して広げられたか。

視点3：チームティーチングの特性により、学習指導の充実を図ることができたか。

①開会の言葉

②司会者あいさつ

③研究協議担当者の紹介

【集合体育】

①授業者から反省点

- ・時間がなくて、ゲームの時間を十分に保証できなかった。（説明に時間がかかった）
- ・作戦を決める際のポイントを全体の場で確認すべきであった。
- ・チームでの話し合い（視点2）にかかわって、協議の中で指摘していただきたい。

②研究協議

◆仮説2にかかわって

○チームで話し合う際に、具体的な話し合いの方法や指示はあったのか。

→ゲーム後うまくいったところ、いかなかったところを話し合わせるように指導している。

話し合いの方法・ルールは6年生のリーダーに任せている。

※「はまなす」では他の教科でも国語の話し合い・ディベートなどで話し合い活動を行った。

はまなすの活動では「コミュニケーションづくり」を意識して授業作りをしている。

◆仮説3にかかわって

○指導案や系統立ての際に大事に授業作りを行ったのか。

→全4回の中で、毎回指導者の反省を行い次回につなげている。

グループ担当の先生が話し合い等の指導援助に当たる。

互いに気づきながら授業できるところがはまなすの伝統。

メインの教師を入れ替えながらみんなで指導している。

○TTに入っている先生はどのように感じているのか。

→T2…集団のまとまりが身についてきた。

体育の技能と同時に「ルールを守る」という意識が身についてきている。

T3…普段は見られない仲間とのかかわる力が育っている。(話の進め方など)

○グループ活動でT2・3がグループにつきながら直接指導できるのがいい。

中学校入学を見据え、仲間づくりとしてもよい。

Q「身長別チーム」の意図は→背の小さな子にも活躍させるために行った

○集合学習で自分の気持ちを伝える、「自分の考えをもつ力が育つのではないか。いろんな教科でも年間を通して行っている点がすばらしい。発表も話し合いの力は単式の学校でも大事な要素だと感じた。

○他の「はまなす体育」の様子は

→・水泳では、低中高ブロックで実施。一緒に泳ぐ友達がいて楽しそうな表情

集団で大事な話を聞く姿勢づくり(集団性の育成)

・球技は ソフト・サッカー・バレーボール・バスケットボール の4年1サイクル

◆授業の感想など

○集合学習の良さを生かしつつも、今日の授業では、運動量を確保できるとよかったと思う。

○集団活動の力をどうとらえるか

・チームでゲームをすることでつける力 ・話し合いのちから

…この時間はどの力をつけるのか 単元を通しメリハリをつけた展開が考えられると良い

○組織的に組み立てられた取組、指導の視点が明確になった取り組みであった。

縦割りの活動になったときの各学年の目標の明確化が必要

学年に応じた活躍の場をいかに作るか

来年に向けて… 計画・教師の役割の明確、各学年の指導の目標を明確化

③研究協議のまとめ(助言者から)

◆授業の成果…3校の集合学習45年以上研究が生まれ、受け継がれている点に敬意。

教育課程に位置付けられている点に意味がある。

意図的・計画的に教育課程が作られている。

(ポイント) ①柔軟・ハンドリングの際のT2・T3の動き 声かけ・一緒にやる

当り前のことを当り前にやることを研究授業でも見せる。それがTTのあるべき姿

②子どもに師範させる際に指示を伝え、意図的な指導をおこなっている

③教師の役割分担がされている。衆と一練習

◆今後の研究（課題）

キーワード「指導と評価の一体化」

○目標ねらいをふまえた授業づくり・指導

3・4年生…基本的ボール捜査・ボールを持たないときの動き（スペースへ動く）

5・6年生…ボールを受ける時の動き（パスをしっかりと出せる）

→各教師が各学年の目標をおさえ、声をかける。

（中学年はスペースに走る。高学年はスペースにパスを出す。）

→評価につなげる。

○子供にどう意識化させるか（自己を高めるか）高まった自分を感じさせる。

習いをはっきりさせることで、単元構成がはっきりする。

○ねらいの違う各年をどう工夫するか。

56年はバスケ 34年はシュートボール

→ルールを変える 「中学年はゴールにぶつければ得点」「高学年はシュート」等
男女差・経験差を埋めることができる。

【集合音楽】

①授業者から

- ・プリントに曲の様子をよく書けていた。
- ・高学年がうまく話し合いを進めていた。
- ・前回に比べて、目当てに近づいた演奏になった。

◆授業の感想など

Q 選曲の意図は何か → 合唱は 今年の芦野・浜猿払ベース 器楽演奏は話題性

Q 音楽的な用語「さび」「メロディー」を使った指導について

→特に指導はしていないが、子どもたちは分かっている。

②研究協議

◆視点3にかかわって

- ・TTで気をつけてきたことは何か

→T2…どうやって声をかけるか、教師間の話し合いで一貫性を持つことができた
役割明確化（メイン・サブ）でスムーズな動きを作ることができた。

- ・個別の配慮事項は

→特別支援の子には特別に配置 パートごとに教師を配置した。

○はまなす音楽は教育課程づくりが急務。TTの動きは次年度に向けての課題である。

○授業づくりで苦勞した点・工夫した点は何か

→積み重ねてきた縦のつながりを信じてグループ活動を入れた
各校の練習の進み具合が分からず、本番までドキドキ。
子供たちは色々感じ取ってやってくれた。

◆授業の感想など

○小学校でしっかりとした合唱指導がされているのを感じた（中学校でも生かされる）
リーダーとなる高学年が意見をしっかりとまとめられていた。

○低中高のねらいの違いをどう組み立てるか

場合によっては分けてやることも必要ではないか。低中高で学習→全体合わせなど
授業の前後で子供たちの変容はどうだったのか。

→今回は録音した演奏を聴かせた。 反応が良かった「曲になってる！」
「たくさんでやると、こんな風に聞こえるんだ」という風を感じた。

○久し振りに聞いた子供たちの声。とても楽しそう。成長を感じた。

高学年の話し合いの進め方。キーワードの使い方の指導が課題ではないか。
演奏のフィードバックが効果的であった。

③研究協議のまとめ（助言者から）

○集合学習として

- ・集合学習の方法論を論ずるよりも、音楽の授業として考えるほどレベルが高い。
- ・3校の垣根がなく、グループ学習ができ話し合いができるほど子供たちは育っている。
→音楽の授業としてさらに研究するとよい。

○楽譜に選定の難しさ

- ・発達段階に応じた表現の仕方を指導する必要がある。
- ・曲のイメージの捉え方
低学年…明るい・軽い など 高学年…力強い・テンポ・調整 など
(評価) どんな観点でみとるかを指導案に明記することでよりリアルに評価できる。
- ・学年に応じたパート・担当に工夫があった→ 合わさった時の喜びを感じられていた

○「音楽の授業として」より意識付けをしてかかわることでさらに伸びる可能性がある。

○集合学習が自校の教育課程に位置づいている点が評価できる。

全道的に難しい課題に取り組んでいる。